

同一性と差異性の新たな理解を求めて

コリングウッドの歴史理解を通して

片柳 榮一

多元主義に関わる基本的な問題を考えるために、歴史的相対主義の問題で苦闘したイギリスの思想家 R. G. Collingwood (1889-1943) を取り上げてみたいと思う。彼は歴史的知に含まれる相対性、特殊性と普遍性、統一性の問題を哲学的に深く考察した人であり、歴史的知のうちに同一性と差異性と新たな統合の可能性を見いだそうとした人である。現代の立場からは、なお不十分であるとの批判はあると思うが、考えるべき課題が何であるかについては貴重な示唆を与えてくれるように思われる。

コリングウッドは、歴史的知の本性を深く追求した哲学者であるが、その根底にある問題意識は、人間的な「知」の全体的解明である。彼によれば、17 - 19 世紀の哲学思想の課題が、自然科学的認識の本性の解明にあったのに対して、20 世紀の思想の最大の課題は、歴史的知の本性の解明にあるという¹⁾。彼がそのように歴史的知に焦点を当てて行かざるをえなかったのは、近代における知の典型と考えられる自然科学的知そのものが、歴史的に生成してきたものであり、自然科学的知もその生成の基盤を歴史のうちにもっているとの認識の故である。その意味では知識のパラダイムの歴史の変遷を問題とした Th. クーンなどの先駆者とも言えよう²⁾。しかし彼の問題意識はさらに深い。彼は「自然の観念」の結論部で次のように述べている。「私の結論といえば、思惟の形態としての自然科学が存在し、これまでいつも存在してきたのは、歴史のコンテキストの中においてであり、自然科学はその存在を歴史的思考に負っているということである。このことから敢えて私は次のように推論する、つまり誰も歴史を理解することなくしては、自然科学を理解することはできないと、また誰も歴史が何であるかを知らないでは、自然が何であるかとの問いに答えることはできないと。これはアレクサンダーや

ホワイトヘッドが問わなかった問いである。また「ここから何処へ行くのか」との問いに対して私が、「自然の観念から歴史の観念に向かう」と答えるのはこの理由からである³⁾。ここから窺えるのは、コリングウッドが自然学の後に来るものという意味での形而上学(メタフィジカ)として歴史的知の領域を考えていたということであり、人間的知の根本的形態を「歴史的知」として明らかにしようとしていたということである。そのような意味の定められた彼の「歴史的知」についての考察を見てみたい。

(1) 歴史の相対性

彼の同時代の多くの思想家同様、コリングウッドもその思想の出発点を第一次世界大戦の経験に置く。この大戦は、一方で自然科学の未曾有の勝利であったと言えるが、他方人間の知性の面目を失わせるものであった。「人間に関わる事柄 human affairs を支配する能力が減じると同じ度合いで“自然”を支配する人間の能力は増大しているように見える。これは誇張のしすぎかもしれない。しかし1600年頃からの自然を支配する能力の巨大な進歩が、それに対応する人間の状況 human situation を支配する能力の増大を伴っていなかったことは、紛れもない事実である・・・必要なのはより一層の人間の善意や、より一層の人間の感情といったものではなく、人間の事柄へのより一層の理解であり、如何に状況を扱うべきかに関するより以上の知識である⁴⁾。このことは21世紀の今日、一層の規模で問題になっていることである。核兵器、生物化学兵器の取り扱いや、また生命倫理の問題にみられるように、我々は自然科学がもたらした成果を十分担いきれず、それがもたらす人間生活への危機的とも言える変化と脅威を測りかね、統御できずにいるのである。コリングウッドは人間的状況を支配する能力の獲得は、歴史的知の獲得にかかっているとす。彼にとって歴史的知とは糊と鉄で、年表をつくり出すにすぎないものではない。これこそ人間の状況を支配しうる力としての知であるという。そのような価値を与えている歴史的知とは如何なるものなのであろうか。それを明らかにすることがこの論文の課題であるが、我々は考察の出発点を彼が1928年に書いた「歴史的知の限界」⁵⁾においてみよう。彼はここで歴史的知の弱点とも見えるものを逆手にとって、歴史的知の本質的なものを鮮やかに提示している

のである。

彼はこの論文の中で歴史的知に含まれる基本的制限を問題にする。しかしここで問題になっているのは、300年ほど前、デカルトが、歴史的知を数学や形而上学に比べて、疑わしいものとしたそうした不完全性ではない。現代の歴史学は歴史的資料の批判的解釈の成果であり、それは十分知識の名に値すると彼は考える⁶⁾。ここで言われる歴史的知 historical knowledge の負う制限とは、正確で信頼に足る資料がきわめてわずかであるということである。アレクサンドリアの図書館が焼けていなければ、フランス革命による大量の資料の破壊がなければ、といった嘆きである⁷⁾。こうしたことから歴史的知へ懐疑が向けられる。これに対してコリングウッドは、次のような歴史家の経験を述べる。それは未だ解決していない困難な歴史的問題を第一線の歴史家同士が論争し合う場合である。そこでは紛れもない、一つのいわばゲームのルールのようなものが存在している。それは君がそれに対して証拠を提出しえないようなことは、たとえそれが真実であっても言うてはならないというルールである。このゲームに勝つのは、実際に起こった事件を再構成しうるものではなく、すべての人々に近づきうる証拠に支持された見解を述べる者である。そしてコリングウッドによれば、このゲームのルールこそが、歴史的思惟の定義なのである。「歴史的思惟 historical thinking とは出来る限りの批判的技術をもって、到達しうるあらゆる証拠 evidence を解釈すること以外ではなく、“実際に起こったこと” というのが、“証拠が示すこと” 以外のことであるなら、歴史的思惟とは、実際に起こったことを発見することではない。」⁸⁾ 例えばそれに関する如何なる証拠も残っていない事件がかつて起こったとしても、その事件は歴史家の世界の一部にはならない。このような意味での実際に起こったことは、物自体であり、認識者との如何なる関係も持たないものであり、「それは知られていないというだけでなく、知られえないものであり、知られえないというだけでなく、存在しない non existent ものである」⁹⁾ ここでコリングウッドは、あらゆる思惟の抜きがたい傾向としての素朴なりアリズムとでもいうべきものを指摘する。対象を物自体として考える傾向であり、認識とのいかなる関係ももたない、それ自体において存在しているものとする傾向である。こうした観点からすると歴史の対象は、生起した出来事の総体として現れ、歴史家の目的は過去自体の発見であり、

生起した全てを見つけだすことにあるように思われる。

コリングウッドは歴史認識における素朴なリアリズムを批判し、その内に含まれた前提を取り出す。こうした考えによれば生起した出来事は何でも、歴史的知の可能で正当な対象であり、歴史家は本来みなそれを知るべきだということになる。すると歴史的知の限界は過去としての過去の限界でしかないことになり、カエサルがルピコン川を渡る前の日の食事が何であったかという問いは、彼が皇帝になろうという意図があったかどうかという問いと同じような歴史の問題であることになる¹⁰⁾。さらに歴史的リアリズムによれば、過去は今なおそれ自体として何処かに存在していることになり、ガリレオはいまも物体を塔から落としていることになり、ネロのローマの煙は今もどこかで燻っていることになり、「生起することを終えた出来事は、まさに何ものでもないのであり、それは如何なる種類にせよ存在をもたないのである。過去は端的に存在しない¹¹⁾」。歴史家は過去を取り扱う場合、このことを痛切に感じるのであり、このことを明瞭に恒常的に感じなければ、歴史家の技術そのものも危なかしいものであることを彼は指摘する。

ここで指摘されたことはコリングウッドの歴史哲学を考えるうえで極めて重要である。歴史が対象とするのは、「過去」であるが、この「過去」とは我々が通常素朴に考えているような、存在物ではない。過去は「在った」ものではあるが、現在「在る」ものではない。当たり前のことであるが、我々にとってはこれは厄介なことである。コリングウッドは同じく1928年の「歴史哲学の概要」の中で、この問題を「歴史の対象の観念性 the ideality of History」と名付けて取り上げている。「さて現在生起しつつある出来事は、現実活動的 (actual) である。既に生起した出来事は、生起しつつあるのではなく、現実活動的ではない。歴史的思考の対象であるすべての出来事は、生起しつつあるのではない出来事である。なぜならそれらは生起することを既に止めたのであり、それゆえ現実活動的ではないのである。この命題を私は「歴史の観念性」と呼ぼうと思う。観念性という言葉で私が意味しようとしているのは、現実性を持たない、思考の対象であるという性質である。このように観念的事物とは、実際に存在することなく、思考の対象であるものと言えよう。観念的性質とは、どこか現実存在する事物において実際例示されることのないまま、思考の対象となるものと言えよう。観念的出来事と

は、現在生起しておらずに思考の対象であった出来事であると言える¹²⁾。この歴史の観念性という命題の射程は、思いの外遠くまで及ぶものであり、彼の中心思想としての「再遂行」という考えも、歴史としての過去は、事物の如きものとして現在の傍らに「在る」ものではないという認識から、必然的に要請されたものなのである。このことは後に詳述するとして、この歴史的知の限界とも見えるもの、またそれに由来する歴史に対する懐疑主義とも言えるものを彼は逆手にとって、歴史家が真に目指しているもの、欲しているものが何であるかを明らかにしてゆく。歴史家が真に目指しているのは、もの自体としての過去ではない。「歴史家が欲しているのは、ありのままの現在である。彼は自らを取り巻くありのままの世界を欲するのである。・・・彼は、彼の世界が、現在あるようになったその経過を、心のうちに再構成したいのである。そしてこの経過は現在進行しているのではない。リアリズムが主張するような認識の説明、つまり自存的に現存する対象の知覚といった説明は、歴史家の認識には適用されない¹³⁾。歴史的思惟が目指すのは、「過去」であるが、それはもの自体としての過去ではない。そのようなものは存在しないのである。それゆえにこそ「歴史の観念性」という命題が提起されねばならなかったのである。歴史家は、唯一存在する現在から出発せざるをえない。この現在に残された跡から立ち現れるものとしての「過去」、彼の世界の過去、彼の過去を歴史家は知ろうとしているのである。歴史を問題とするコリングウッドが踏み出す思惟の歩みの第一歩は、過去は存在しない、という当たり前の事実を厳粛に受け止めることであった。

歴史家が求める「過去」は、我々が現在知覚しうるこの現在の過去であり、理想的には、知覚しうる現在の全てを証拠 evidence として用いて過去を再構成することである¹⁴⁾。もちろんこの理想は達成されないが、この理想と現実の乖離は何も歴史学だけに固有のことではない。この意味で歴史学の成果は決して最終的なものではない。evidence の所在としての現在そのものが変化するからであり、また evidence を検証する基準そのものが変わるからである。その意味で歴史的知は本質的に相対性に晒されており、それぞれの時代が独自の歴史をもつのであり、何時の時代にも通じるといような絶対的に客観的な歴史などないことになる。しかしそれは全くの歴史相対主義、懐疑主義ではないのか。このような問いに対してコリングウッドは言う。「しかしこれは歴史的懐疑主

義に組みする議論ではない。これは唯、歴史的思惟の第二の次元の発見にすぎない。それはつまり歴史の歴史 (the history of history) のことである。歴史家自身、彼に近づきうる証拠の総体を形成する今 - ここ共々、自らが研究している過程の一部であり、その過程のうちに自らの場を持つということ、そして現在の瞬間にそのうちに彼が場を占める立場からだけしか、この過程を見ることができないということの発見である」¹⁵⁾。

コリングウッドは歴史の対象の特殊な性質 (quality) としてその観念性を強調した。そのことの意味は歴史の対象が実在性のない屋気楼のようなものであるということではない。その観念性は、現在という唯一の現実に残された過去の跡を、想像力を介して解釈した証拠に基づいて構成されたものであるということである。その意味で、歴史家は己の現在という中心からものを見ているのである。しかし通常そのことを歴史家は気にとめない。自らの客観的对象にのみ目を向けている。しかし今見た如く、歴史の対象の観念性に気づくことは、自らが歴史のパースペクティブ自身を構成していることに気付くことである。歴史の観念性を認めるということは、歴史家のもつ世界が、自らのうちに中心を持つモナドの世界であることに気づくことである。「このように歴史家が自ら自身の歴史的思惟を反省するかぎり、歴史家は自ら自身の思考の単にモナド的でしかない本性を学ぶことになる。しかしモナドは窓をもたない。そして歴史家それ自身は、無限に可能なパースペクティブを調整統合する働きをなしえない。彼は一つのパースペクティブから別のパースペクティブに移って行くことしかできない。彼は決して自らの視点の外に出て、それを様々のモナドの中の一つのものとすることはできない。歴史家はモナドロジストではなく、モナドである。ということは彼は、すべての知覚を囲い込んでいる“自己中心的な窮境”の必然的な犠牲者なのである。こうなるのは、我々が歴史の客観性と呼ぶもののおかげである。歴史家は自らの対象について考える。しかしその対象についての自らの意識については考えない。彼は自らの視点については考えず、彼の視点から考えるだけである。しかし自らの思惟について反省する、つまり哲学することによって、歴史家は、自らがモナドであることに気づく。そして自らが自己中心的窮境のうちにあることを自覚することは、それを超出することである。思考が自らに還り、思考がその対象をそこから考

察していた視点そのものを批判することによってその対象に対する自らの関係の問いに直面する時、思考はこの視点を超越するのである。それ故歴史的思惟について哲学することは、歴史的思惟のモナド主義を超出することであり、モナド主義を後にしてモナドロジーに向かうことであり、単に一つのパースペクティブを見るだけでなく、様々なパースペクティブの空間を見ることである¹⁶⁾。この最後の指摘は重要である。歴史的知は歴史の対象の観念性の故に、自らの現在という中心から構成されたパースペクティブという本質的特徴をもつ。それは自らの視点から見られた、世界の全体というモナド性を本質とする。しかしライブニッツにおいては、モナドそれ自身は、外へ通じる窓を持たない。このモナドはそれ自体で完結しており、外なる他のものには依存しない。他との関係は予定調和的に編まれているにすぎない。しかしコリングウッドは、このモナドの自己完結性を超出することを要請する。そのことを為しうるのは、自らがモナドであることを認める自己反省においてである。つまり歴史の対象の観念性という本性を徹底的に反省することを通してである。この歴史の観念性が認識されるということ、そのことが、歴史の自己中心性、モナド性の超越に通じるというのである。「事実の世界、それは歴史にとって思考の外的な前提であるのだが、この事実の世界は哲学にとって、各自がその中心に歴史的意識を持つ様々なパースペクティブからなる一つの世界と成る。思考する者に相関的な思考の諸世界からなる一つの世界である。諸世界からなるこの一つの世界は、如何なる中心も持たない世界である。その中心は至るところにあり、その周辺はどこにもない」(同 p.56)。中心が至るところにあり、周辺のない世界、これはよく知られているように、クザーヌスやパスカルが好んで用いた表現で、永遠的なものを指し示すものである¹⁸⁾。この古典的表現を用いて、コリングウッドは個々のモナド的歴史的意識を包含する歴史全体の地平を垣間見ているように思える。

コリングウッドの問題意識の根底には、歴史の相対性という問題がある。これは或意味で歴史的知の客観性を揺るがし、歴史の科学性そのものを疑わしめかねない問題である。しかし彼は歴史の相対性を単に否定しようとはしない。これを否定して、絶対的な客観性を歴史的知に与えることによって問題を解決しようとはしない。彼は歴史家が歴史的知の本性を深く反省しないで、現実存在する対象を扱う自然科学的知の尺度

に合わせようとして、歴史の対象の観念性を忘れがちな傾向に厳しい批判をなす。歴史的知は、現在の中にある過去の痕跡から探求の出発をする歴史観察者に相関的であり、本質的に相対的なのである。現在を中心とするパースペクティブ性が、歴史的知の本質的特徴である。しかしこのパースペクティブ性に気づくことはこれを超出することであるという。そしてこの様々なパースペクティブからなる一つの空間、一つの世界へと超出することになるのであるという。その超出は如何にして為しうるのだろうか。ここでもこの超出は、この歴史的知の本質への深い洞察によってなされるしかないことをコリングウッドは見定めているのである。

(2) 再遂行 (reenactment) としての歴史

コリングウッドは歴史的知を次のように定義している。「歴史的知 historical knowledge とは、歴史家がその歴史を研究している思想を、歴史家の心の内で再遂行することである」¹⁹⁾。我々はようやくこの有名な歴史的知の定義を理解しうる地点に到達したように思える。この定義は通常、過去の思想を解釈する方法として理解され、歴史の問題を扱った多くの書物で取り上げられているが²⁰⁾、必ずしも充分理解されているとは言えないように思われる。この定義は単に、過去の思想の解釈の問題に関わるのではないように思える。そうではなく先にコリングウッドが歴史的思惟の第二の次元、ないしモナドロジー的世界への超出と述べたことに関わるものであり、歴史の解釈についてというより、歴史的知というものの本性に関わるものであると思う。この歴史的知のモナドの本性を洞察し自覚することが、モナド性を超出することを可能にするものであり、そのような広がりと深さを持ったものとして取り扱われるべきであるように思える。

彼はこの考えを有名な「歴史の理念」第五部第一章で展開している²¹⁾。彼はまず歴史性 historicity という言葉の曖昧な使い方をいましめる。生物の進化論や現代の物理学や天文学の主張では、全ての事物が或る時間を経ることによって本性を変えてゆくという意味での変化を歴史性と呼ぶ場合が多い。こうした考えを哲学的に述べたのが、ベルグソンやアレクサンダー、またホワイトヘッドである²²⁾。すると自然の経過と歴史の経過との区別は取り払われたように思われる。

このような考えを歴史家に述べると、彼は否定的に答える。歴史と真に言えるのは、人間の事柄だけだと。歴史家が過去の出来事を探査する場合、彼はいわば、出来事の外面と内面とを区別する。外面とは例えば、カエサルがルビコン川を家来と共に渡ったとか、元老院でブルータスに殺されたとかいうことである。これに対して内面とは、共和国の法に対するカエサルの不信とか、ブルータスとカエサルとの政策面での相違とかいうことである。歴史家は単に外面的事件のみを探るのではなく、行動（actions）を探るのであり、これは内面と外面との統一なのである。自然の経過は、こうした内面と外面との区別を持たない。それに対して人間の歴史は、行動の経過であり、内面を持っている。そしてコリングウッドはこの内面を思想（thought）と呼ぶ²³。この出来事の内面を理解するのは、歴史家がこの thought を自らの内で繰り返すことによるのみである。だから歴史とは単に継起する出来事を物語るのではなく、また単なる変化の記述でもない。歴史家は自然科学者と異なり、出来事そのものに関心を示すのではなく、思想を外面的に表現したような出来事、つまり行動に関心を示すのである。

ここでコリングウッドは歴史家の歴史理解の方法を述べているように思える。しかしコリングウッドの意図はもっと根本的なものであるように思える。彼が述べようとしているのは、先の歴史的知の定義がまた歴史的経過というもののそのものの定義であるということであるように思える。歴史家という、人間の知性活動を専門とする特殊な人間の活動は、或る意味で、人間が日々の生活のうちで繰り返していることを、最も明瞭な形で為しているに過ぎないとも言える。先人が残してくれた生活形態、ものの考え方、そうしたものをそれぞれが繰り返すことを通して、受け継ぎ、批判し、改良してゆく過程、それが歴史的過程であり、他者の思想を自らのうちで再遂行するということは、歴史過程そのもの、あるいは、歴史そのものの定義であるとも言えよう。自然の変化の過程と人間の歴史の過程を根本的に分けるものは、人間の場合は、先のものを受け渡しが、内面における再遂行という形でしかなされないという点にある。決して先人のものを、物の受け渡しのようには受け取れないのであり、物の受け渡しのごとく受け取られるものによっては、歴史は生じないのである。この内面の再遂行の行為、これこそ歴史の根源の姿であり、歴史の淵源であることをコリングウッドは見ているように思える。

コリングウッドは先に、歴史的思惟の第二の次元ということを語り、それは単なるモナド的な歴史家の世界でなく、モナド的世界であることを認識することによってそれを超出する哲学者の立場であることが示唆された。重要なのでもう一度引用しておこう。「事実の世界、それは歴史にとって思考の外的な前提であるのだが、この事実の世界は哲学にとって、各自がその中心に歴史的意識を持つ様々なパースペクティブからなる一つの世界と成る」²⁴⁾ コリングウッドの歴史的知の定義は、先にも述べたようにこの一つなる世界、この第二の次元への射程を持っている。ここではもはや直接、事物の経過が考察の対象になっているのではなく、そうした事物や事件の中で、意識的にではなくとも、己の中心に歴史意識を持った人間、全体を己のパースペクティブで映し出しているモナドとして生きている人間によって繰り返され、再遂行されている、いわば「歴史」の現場が問題になっており、このことを自覚することにおいて人は己の世界を超出する可能性をもつのである。

コリングウッドも述べるごとく、歴史的知は他者に関わる知のことであり、それは自らのうちで、他者の思想を再遂行することによってのみ得られるものである。他者の思想を自らのうちで再遂行する時、そして再遂行する中で、この他者は、自らと同一の世界に有るものとなる。より正確には、自らも他者と共なる歴史の場に出てゆくのである。まさにこの再遂行こそモナド的世界の超出の場なのであり、しかもこの再遂行において、歴史的世界は、真に私の、他者との共通の世界になってゆくのである。

ここで彼の歴史的知についての定義についてもう少し詳しく考察してみたい。思想の再遂行とはどのようなことなのか。単に類似した考えを繰り返すことではないのかという疑問が生じる。これに対して彼はきっぱりと、同一の思想が繰り返されるのだという。彼が例としてあげる、ユークリッドの幾何学の定理や、カエサルがルビコン川を渡ったときの意図などは、我々を当惑させかねない難解さを含んでいる。我々はさしあたり、コリングウッドが思想という言葉で何を考えていたのかを明らかにしなければならない。彼はイギリス、広くはヨーロッパの知的伝統にのっとり、思考 thinking と感情 feeling を厳密に区別する²⁵⁾。そして感情としての意識は、時の変化、時間の流れのなかで二度と繰り返し得ないとする。そしてこの感情の再遂行などありえず、従って感情の歴史

などありえないとする。しかし我々の意識は感情だけで構成されているのではない。「思想 thought とは、単なる直接的経験ではなく、いつも反省であり、自己認識であるこうした行為において生きているものとしての自らについての認識である」²⁶⁾。彼が根本において考えているのは、我々の様々な経験を貫いている、能動的、主体的行為ともいえる自己意識の統一性であるように思える。「思想を単なる意識から区別する肯定的な特徴は、自らの諸行為の多様性を貫いて持続する単一なる活動 activity として自己の活動を認識する能力である」²⁷⁾。我々の感覚や情念は、それぞれ個別で繰り返しえないものであるが、それらを貫いて、我々は繰り返し自己を意識しており、いわば自己を繰り返している。自己とは経験の前提ではなく、この経験の多様な変化の中で、いつも繰り返しているもの、同一なるものとして現れてくるもの、それを自己と名付けるのである。だからこれは抽象的なものでなく、最も豊かな具体性なのである。そしてコリングウッドはこの繰り返しを単に個人のうちにとどめない。もちろん自己と他者とが直接同一だということではない。彼の同一なるものは、静的な性状としての同一なるものではない。行為の能動性における同一なるものである。異なった状況の中で、同一の思想が繰り返されうるといふ。そしてこれを認めないなら、唯我主義 solipsism は避けられないと言う。人間の社会性、歴史の共同性を可能にするものを彼は探り、見据えているのである。

ところでコリングウッドは先の歴史的知の定義を「自伝」の中で次のように補足している。「歴史的知とは、カプセルの中に入った過去の思想を、現在の思想のコンテクストの中で再遂行することである」²⁸⁾。コリングウッドは、それぞれ異なった状況において、同一の思想が繰り返しようとする。そして我々は過去の思想を己の状況の中で再遂行しなければならないのである。彼は例を挙げる。プラトンは『テアイテス』の中で感覚主義の批判をしている。我々にはプラトンが同時代のどの様な感覚主義を念頭においていたか判らない。しかし我々がプラトンの議論を理解する時、我々は同一の思想を再遂行しているとコリングウッドは言う。これに対してガダマーはコリングウッドを高く評価しながらも、ここでコリングウッドは自家撞着に陥っているのではないかと批判している²⁹⁾。コリングウッドは自伝の中で、或る思想は、それを述べる人の問いと答えの連関の中で考えられるべきで、そのコンテクストから切り

離しては理解されないと述べているからである (p.29-43)。しかしこれはガダマーの誤解であるように思われる。ガダマーはコリングウッドの問題を、他者の思想を理解するという解釈学の問題に矮小化しているように思う。コリングウッドはもっと広い視野で考えているように思える。つまり歴史の生起の問題、プラトンの思想を現代において再遂行する問題として考えていると思う。確かにプラトンの思想は彼の当時の状況の中でのみ正しく理解されるであろうが、我々が現代において現代の状況の中で、現代の感覚主義を批判してゆく時、プラトンの思想の核心を再遂行することが有りうるのである。それ故問題は、過去の他者の思想(いわば物自体として)そのものの理解ではなく、現代の我々の思想の遂行において、過去の思想がその核心において再遂行される可能性なのである。

そしてコリングウッドは、そうした思想の繰り返しの可能性の根拠を、過去は死んだものではなく、生ける過去 living past であることに求める³¹⁾。我々が過去に出て行くのではなく、過去は現在に生きているのである。「最後に言えば、過去そのものは何ものでもない (nothing) のであるから、過去そのものについての知も存在せず、存在しえないのである。歴史家の目的は、思考する存在の目的として現在の認識である。この現在へあらゆるものが回帰しなければならないのであり、この現在の周りをすべてのものが回転しなければならないのである」³²⁾そしてこの現在は己の現在であり、しかもこの現在は、己の世界も、プラトンの世界も共にあるような現在であり、そこではそれぞれが自らの現在を中心にしてパースペクティブをもつのであり、そのような様々なパースペクティブからなる一つの共通の現在なのである。

ところで同一の思想が異なった状況の中で繰り返すという表現は誤解を与えかねない。同一のものが始めからあって、それが変わらず繰り返すように考えられる。しかしそれなら時間と歴史は意味ないことになる。コリングウッドはそのような同一性を考えているのではない。それでは他にどのような同一性と差異性の捉え方が存するのか。コリングウッドはこの問題を「哲学的方法についての試論」³³⁾で扱っている。

(3) 同一性と差違性と新たな理解

コリングウッドはこの書のうちで、哲学に固有の論理を見いだそうと

する。彼はそうした論理を *overlap of the class*（組分けされたものの重なり合い）と呼ぶ³⁴。これはヘーゲルが弁証法という論理で言い表そうとしたことに通い、またベルグソンが純粹持続という言葉で表現しようとした事態にも通じることである。自然科学の場合、class は重ならない。例えば生物という類 *genus* は、動物と植物という種 *species* に分けられる。もちろん微生物の中にはどちらにも分けられないものもあるが、生物学はその体系からしてどちらかに分けようとし、そのどちらにも属するというようなことを原則的に認めない。類の下に属する *subclass* は互いに排除しあうという特徴を持っており、動物は植物を、生物であるかぎり自分の仲間だと認めるが、動物である限りにおいて、植物を己の仲間から排除する。こうした分類を我々は通常用いている。

しかしコリングウッドは哲学の対象の場合、こうした分類は必ずしも当てはまらないという。アリストテレスはニコマコス倫理学の中で、善という概念は、彼の創出したどのカテゴリーにも入り得ず、カテゴリーの区分けを突き抜けていることを認めている。このことはスピノザの「全ての存在は一にして、真であり、善なるものである」という表現にも当てはまる。統一と真と善とは、互いに排除しあう三つの種 *species* ではない。哲学においては、或る類概念をさらにその種に区分する時、その種に分けられたもの同志が互いに排除しあうということは必ずしも当てはまらず、相互に重なり合うとコリングウッドは言う。

彼はこの *overlap of the class*、つまり哲学特有の、同一性と差異性の統合の問題をさらに考究する³⁵。彼はこうした重なり合いを説明するために、或る種の、*difference of degree*（度合いの相違）を考えねばならないとする。しかしそれだけでは組み分け *class* が生かされないので、何らかの、*difference of kind*（種類の相違）も考える。この二つの相違を組み合わせる必要がある。彼は一つのモデルとして水の場合を考える。水と水蒸気と氷とは、或る意味で三つに組分けされるが、この区分は絶対的なものではなく、一つの本質が温度差によって分けられたものである。彼はこうしたモデルを *scale of form*（形態の階梯）と呼ぶ。つまり一つの類を同じくする本質が、幾つかの転換点 *critical point* を境にして形態を変えるような列のことである。哲学の場合の代表的なものは、プラトンの知識の *scale* である。ここではドクサ（臆見）、ディアノイア（知識）エピステーメー（真知）のように区分される³⁶。哲学と水の

scale における相違は、二つある。一つは度合いの相異という場合の度合いが、水の場合、測りうるものであるが、哲学の場合は質の度合いであり、本来測り得ないものであり、しかも一種の増減が考えられる。もう一つの相異はより重要で、水の場合、それぞれの scale の形態は、このものの類的本質 generic essence にとって外的である。この場合本質は H₂O で表されるが、ガスの状態、流動状態、固形状態という三つの形態は、先の本質と単に外面的な関係しか持っていない。これに対して哲学的 scale の場合、変化するものはその本質において類的な本性と同一である。

先のプラトンの例で言えば、ドクサやディアノイアもやはり知識である。そして程度の高いものほどその本質を明瞭に explicit に示しているが、低いものもその本質を暗々裡に implicit に含んでいる。この scale は、パスカルの二つの無限のように³⁷⁾、両方に限りなく開かれている。コリングウッドは善と悪をもこの scale で考える。どんなに悪と見えるものも、まったく善を欠いたものではなく、この scale を降りて行っても、決してゼロには至らない。無限に小さく分割されながら、そこになお善の要素が残されていると考える。この scale の上の二点をそれぞれ自身で見れば、善であるが、高いものから見ると、低いものは、自らの転倒であり、否定されるべきものであり、悪であると言える。あるいは低いものは、高いものの現象であり、高いものが実在であることになる。このようにこの scale 上のそれぞれは、それに至るまでの階梯すべてを総決算したものであり、そのどの地点も、それより上のものから見ると、単に現象に過ぎず、実はこの高いものに有ることになる。しかしそのいずれも類的本質は同じであり、上に行くに従ってそれまで implicit であったものを explicit に表すのである³⁸⁾。

コリングウッドがこうした階梯の論理を持ち出すのは、これこそ歴史の論理を示すからである。先の歴史的知の定義に見られた思想は、この scale の上にあるものである。他者の思想を己のコンテクストのうちで再遂行するとき、同じものが繰り返されるが、単にすでに不変なものとしてあるものの同一性が繰り返されるのではない。再遂行は本質的に批判であると彼は言う³⁹⁾。先人の思想においてそのうちに implicit に含まれながら覆われているものを、再遂行する者は explicit にし、それを覆っているものを批判によって取り除かねばならないのである。

歴史の論理はこの階梯の論理だという時、誤解してはならないのは、この scale は時間と同一のものではないということである。時間を経るに従って、scale の上にいるというのではない。彼の死の直前に著した New Reviathan という歴史文明論の中で、彼は偶成の原理 principle of contingency ということ述べる⁴⁰⁾。それはこの scale が時間のそれでもなく、論理的発展でもないからである。

彼は歴史の中にこの階梯の論理を見る。彼にとって歴史の scale の類の本質は精神 mind である。歴史はその根底において mind の世界である。各々が自らのうちに中心を持ち、その perspective から世界全体を映し出し、歴史を映し出しているモナドである。そしてこの孤立したモナドは、自らのうちで他のモナドの世界を再遂行する時、モナドを超出する。超出するといっても、自らは自らに留まりながら、つまりあくまで自らの思想 thought でありながら、他者の世界を繰り返し、この批判的再遂行のうちで、これまで implicit であった mind の本質を explicit にしてゆくのである。そしてこの mind の本質は、抽象的に言えば「自由」ということである⁴¹⁾。しかしそれが本当に explicit になるかどうかは、批判的再遂行がどこまでなされるかにかかっているのであり、しかもそれはけっしていわゆる歴史の必然などではない。確かにそこには論理はある。しかし後から発見するのである。確かに我々現在までの、つまり我々が今ある現在の論理構造を明らかにすることは出来る。確かに現在は、過去を総計しているという意味では頂点にある。しかしこの頂点は越えられるのである。そしてどのように越えられるかは、現在にある我々には知られ得ない。それがこの scale の根本特徴であり、偶成 contingency とはそのような意味である。しかしこれは歴史相対主義ではない。コリングウッドは確かに「形而上学に関するエッセイ」において、我々の思考が前提となし、その前提によってのみ、問も生まれるような絶対的前提というものがあり、カントがアプリアリといったものはそのようなものであるが、この絶対的前提も歴史の変化の中で移ってゆくことを述べている⁴²⁾。そこには歴史的偶成にたいする徹底した認識がある。しかしそれは単なる歴史相対主義ではない⁴³⁾。彼をそのように誤解するのは、この階梯の論理を見落としているからである。mind を本質とするこの scale から、歴史は外れることなく、我々のこの現在に implicit に含まれていないものは、歴史の未来に explicit にされるこ

とはない。このような mind の現在の場がコリングウッドが立つ最後の場であると言えよう。そしてこの場は、モナダ的歴史意識をもったそれぞれが、自己のモナダの世界を超出して出てゆく、真の歴史的世界である。それは先に引用したモナドロジエ的世界であるが、その表現は古典的には永遠的なものを意味したものであり、それを歴史の世界として用いるコリングウッドの意図は深長である。彼にとっては、多数のパーспекティブから成るこの一つなる歴史的世界そのものが、一種永遠的な重みをもっているのである。「諸世界からなるこの一つの世界は、如何なる中心も持たない世界である。その中心は至るところにあり、その周辺はどこにもない」⁴⁴⁾

註

- 1) R.G.Collingwood, *The New Reviathan*, Oxford 1942, p.129.
- 2) Th.Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions*, Chicago 1962.
- 3) R.G.Collingwood, *The Idea of Nature*, Oxford 1945, p.177.
Collingwood の思想を論じた主な研究書を挙げておく。
Donagan, *The later Philosophy of R.G.Collingwood*, Oxford 1962.
L.O.A.Mink, *Mind, History and Dialectic*, Bloomington 1969.
L.Rubinoff, *Collingwood and the Reform of Metaphysics*, Toronto 1970.
W.H.Van der Dusen, *History as a Science: The Philosophy of R.G.Collingwood*, The Hague 1981.
W.Dray, *History as Re-enactment*, Oxford 1995.
- 4) R.G.Collingwood, *An Autobiography*, Oxford 1939, pp.91.
- 5) R.G.Collingwood, *The Limits of Historical Knowledge*, in *Essay in the Philosophy of History*, p.99.
- 6) *ibid.*, p.91.
- 7) *ibid.*, p.93.
- 8) *ibid.*, p.99.
- 9) *ibid.*, p.99.
- 10) *ibid.*, p.101.
- 11) *ibid.*, p.101.
- 12) R.G.Collingwood, *The idea of History*, Oxford 1994, p.439.
- 13) R.G.Collingwood, *The Limits of Historical Knowledge*, in: *Essay in the Philosophy of History*, p.101.
- 14) このことに関しては、R.G.Collingwood, *The Idea of History*, pp.249 参照。
- 15) R.G.Collingwood, *The Idea of History*, p.248

- 16) R.G.Collingwood, *The Nature and Aims of a Philosophy of History*, in: *Essays in the Philosophy of History*, Oxford 1965, p.55
- 17) *ibid.*, p.56
- 18) B.Pascal, *Pensée* 199 (Lafuma)
- 19) R.G.Collingwood, *An Autobiography*, Oxford 1939, p113
- 20) H.G.Gadamer, *Wahrheit und Methode*, Tübingen 1975, S.485ff. R.ブルトマン「歴史と終末論」(岩波書店) 169-178 頁、E.H.カー「歴史とは何か」(岩波書店) 25-40 頁。
- 21) R.G.Collingwood, *The Idea of History*, p.210.
- 22) *ibid.*, p.211, cf. A.N.Whitehead, *Process and Reality*, New York 1978.
- 23) *ibid.*, p.213.
- 24) R.G.Collingwood, *The Nature and Aims of a Philosophy of History*, in: *Essays in the Philosophy of History*, Oxford 1965, p.56.
- 25) R.G.Collingwood, *The idea of History*, p.287.
- 26) *ibid.*, p.297.
- 27) *ibid.*, p.306.
- 28) R.G.Collingwood, *An Autobiography*, p.114.
- 29) H.G.Gadamer, *Wahrheit und Methode*, S.486f.
- 30) R.G.Collingwood, *An Autobiography*, p.29-43.
- 31) R.G.Collingwood, *The Idea of History*, p.225.
- 32) R.G.Collingwood, *The Philosophy of History*, in: *Essays in the Philosophy of History*, p.139.
- 33) R.G.Collingwood, *An Essay on Philosophical Method*, Oxford 1933.
- 34) *ibid.*, p.26-53.
- 36) *ibid.*, p.55-91.
- 36) Platon, *Politeia* 533E-534A.
- 37) B.Pascal, *Pensée* 199 (Jafuma).
- 38) R.G.Collingwood, *An Essay on Philosophical Method*, Oxford 1933, p.91.
- 39) R.G.Collingwood, *The idea of History*, p.217.
- 40) R.G.Collingwood, *The New Reviathan*, p.65.
- 41) R.G.Collingwood, *The Idea of History*, p.315-320.
- 42) R.G.Collingwood, *An Essay on Metaphysics*, p.231-337.
- 43) Collingwood の立場を、殊に晩年の思想を歴史的相対主義とみなしたのは、*The idea of History* の編者 T.M.Knox であり、Donagan もそれに近い立場である。
こうした解釈を厳しく批判したのは、Rubinoff である。彼はあまりに *Speculum mentis* (1924) の頃の Collingwood の思想を重視しすぎるよう

にも思えるが、筆者には共感するところが多かった。

44) R.G.Collingwood, *Essay in the Philosophy of History*, p.56.

(京都大学大学院文学研究科教授)